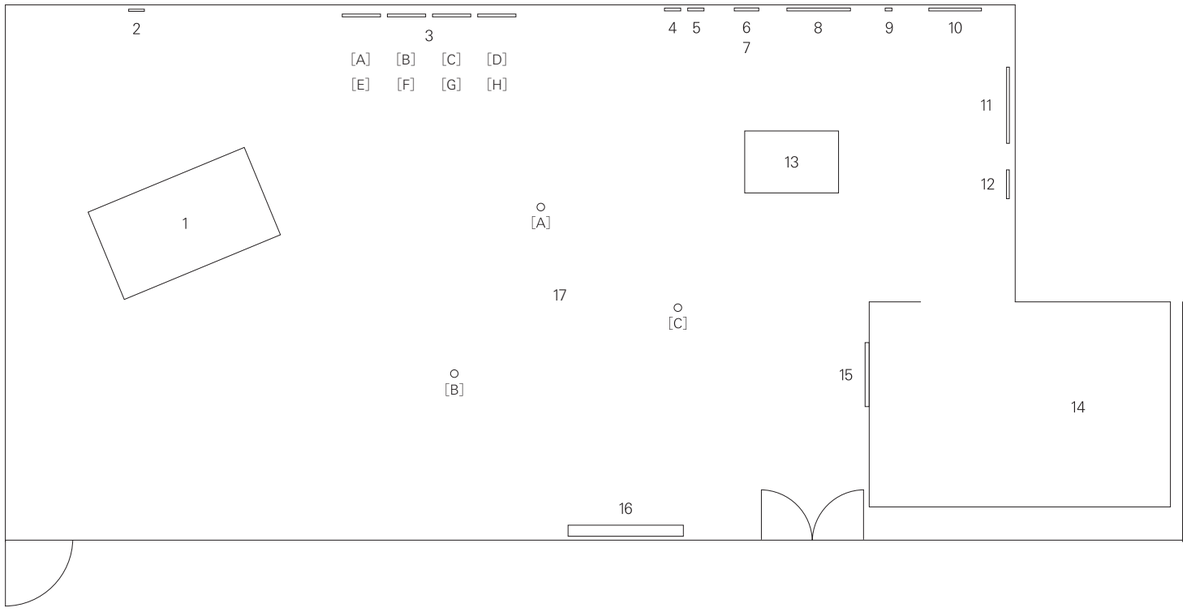
会場図面



1. 上村洋一
《phantom power》（2019）
サウンド・インスタレーション
流氷を溶かした水、グラス、ウーファースピーカー、鉄板、サウンド
サイズ可変
-
Yoichi Kamimura “phantom power” (2019)
Sound Installation
water generated by melting drift ice, glass, metal plate, speaker, sound
size variable

水をたたえた様々な形状のグラスが、金属板の上に配置されている。水は、上村がオホーツク海で流氷のフィールドレコーディングを行った時に採取した流氷を溶かしたものである。作品は時折り外光を含み床面に反射を落とし、透明で静謐な風景を作り出す。水面の微かな波紋は低周波によるもので、ハイドロフォン（水中マイク）で録音した、流氷が軋（きし）み崩れて行く音である。波紋は、人間の知覚スケールを越えた所でじわじわと流氷が溶けつつあることを物語る。上村は、冬の間に一時的に現れる流氷を、自身の原風景である東京湾の埋立地と重ねながら「仮の大地」と呼ぶ。グラスが林立する様子は、いつかは消えてしまう風景のようにも見える。

*phantom power：レコーディングの際、マイクロフォンに電力を供給する電源システム。微弱電流だが、マイクロフォンの起動には欠かせない。普段認識することがないものの、世界で確実に進行している環境変化を感知させるための装置として、本作品名とした。

2. エレナ・トゥタッチコワ
《Drift Ice: Minehama, March, 2018, #4》（2018）
c-print イメージサイズ 224mm x 270mm
-
Elena Tutatchikova
“Drift Ice: Minehama, March, 2018, #4” (2018)
c-print image size 224mm x 270mm

海に浮かぶ真っ白な島のような春先の氷は、独立した意識をもつ不思議な生き物のようだ。刻一刻変化する流氷の間を小さな船を漕ぎながら風景を眺め、流氷が知床半島まで辿ってきた海路、その形になるまでのプロセスを想像する。風景の認識は、天気、光、音などを含めて変化するものとして、体内に蓄積していく中で生成する。春先の流氷はこのような自然の変化、風景の変化、またその認識の変化の象徴であるのではないかとトゥタッチコワは考える。

3. 上村洋一
《internal weather》（2021）
-
Yoichi Kamimura
“internal weather” (2021)

[A]
《internal weather (210226_16:27_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:27_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[B]
《internal weather (210226_16:11_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:11_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[C]
《internal weather (210226_16:28_UTOROⅡ)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:28_UTOROⅡ)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[D]
《internal weather (210226_16:17_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:17_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[E]
《internal weather (210226_16:18_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:18_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[F]
《internal weather (210226_13:10_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_13:10_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[G]
《internal weather (210217_12:23_UTORO)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ：600mm × 400mm
-
“internal weather (210217_12:23_UTORO)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

[H]
《internal weather (210226_16:28_UTOROⅠ)》（2021）
ラムダプリント、額
イメージサイズ :600mm × 400mm
-
“internal weather (210226_16:28_UTOROⅠ)” (2021)
lambda print, image size 600mm × 400mm

上村が流氷の録音のために毎年訪れるウトロの岩場・三角岩は、いつもは流氷で埋め尽くされ、岩肌を見ることはない。しかし 2021 年の冬は、雪も氷もほとんど無く、ゴツゴツとした黒い岩肌が姿を表していた。その岩と岩のあいだを歩きながら足もとを見てみると、氷が溶けシャーベット状になった水溜りが点在していた。その中を覗くと、大気圏の雲の動きや宇宙の星々の現象のように見えた。地球温暖化で年々減少している流氷の中に、宇宙規模の壮大な気象変化が見えた気がした。

4. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：古道を歩く、#2》（2020）
c-print、イメージサイズ 330mm × 220mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Old Paths, #2” (2020)
c-print, image size 330mm × 220mm

5. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：古道を歩く、#1》（2020）
c-print、イメージサイズ 330mm × 220mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Old Paths, #1” (2020)
c-print, image size 330mm × 220mm

6. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：古道を歩く、#4》（2020）
c-print、イメージサイズ 220mm × 330mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Old Paths, #4” (2020)
c-print, image size 220mm × 330mm

7. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：古道を歩く、#3》（2020）
c-print、イメージサイズ 220mm × 330mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Old Paths, #3” (2020)
c-print, image size 220mm × 330mm

8. エレナ・トゥタッチコワ
《ひつじの時刻、北風、晴れ、#41》（2018）
c-print、イメージサイズ 830mm × 1000mm
-
Elena Tutatchikova
“Hour of the Sheep, North Wind, Sunny, #41” (2018)
c-print, image size 830mm × 1000mm

9. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：獣道を歩く、#1》（2018）
インスタントフィルム写真、
サイズ 108mm × 86mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Animal Paths, #1” (2018)
instant film photo, size 108mm × 86mm

10. エレナ・トゥタッチコワ
《ひつじの時刻、北風、晴れ、#49》（2018）
c-print、イメージサイズ 1000mm × 830mm
-
Elena Tutatchikova
“Hour of the Sheep, North Wind, Sunny, #49” (2018)
c-print, image size 1000mm × 830mm

［*作品 4–10、15］
トゥタッチコワが 2014-2018 年の間、知床半島の付け根に位置する峰浜地区へ何度も通い制作した写真シリーズ。海別岳麓（うなべつ）にあったパン屋 メーメーベーカリーに滞在し、人々と関わり、森や山道、時には海の道も歩いたパーソナルな経験にもとづいている。峰浜での日々が、彼女にとって知床の全ての道の起源である。そこで制作された作品から知床を歩くプロジェクトが派生し、開拓時代から痕跡が残っている古道を辿る作品などへとつながっていく。

11. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：干潮を待つ、#1》（2020）
c-print、イメージサイズ 905mm × 1100mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Waiting for Low Tide, #1” (2020)
c-print, image size 905mm × 1100mm

12. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：干潮を待つ、#2》（2020）
c-print、 イメージサイズ 313mm × 380mm
-
Elena Tutatchikova
“Shiretoko: Waiting for Low Tide, #2” (2020)
c-print, image size 313mm × 380mm

［*作品 11–12］
2019 年よりトゥタッチコワの作品には、海の道や潮汐（ちょうせき）（海水の干満）というテーマが、詩、映像、写真などとして現れる。水の中を歩き、海中の石を積み重ねる。干潮を待ち、現れてくる海底をたどる。満潮時に見られない地層、割れ目に生える海中の森、生息する様々な生き物を観察していると、地球という一つの大きな生き物の呼吸が聞こえてくる。今回は、潮汐の時間をはかり、何度も訪れてきた場所で撮影した写真作品やインスタントフィルム写真を展示する。

13. エレナ・トゥタッチコワ
《知床：線と落書きと言葉とほかの資料》（2018-2021）
ドローイング、インスタントフィルム写真
-
Elena Tutatchikova
“lines, doodles, words and other materials” (2018-2021)
drawings, instant film photos

14. エレナ・トゥタッチコワ
《たねと大潮》（2021）
ビデオ、33 分
-
Elena Tutatchikova
“Seeds and Spring Tide” (2021)
video, 33 min.

雪が溶け、山や森、海の中では様々な植物が芽生えてくる。その土地で大昔から自生する原種や、遠くから運ばれてきた帰化植物など、ゆっくりと観察しないと気づかないものも多い。全ての生き物に名前を与えるのが人間だが、実際にその名や、土地と人間についての物語を教えてくれるのは植物たち自体ではないか。

15. エレナ・トゥタッチコワ
《ひつじの時刻、北風、晴れ、#48》（2018）
c-print、イメージサイズ 1000mm × 830mm
-
Elena Tutatchikova
"Hour of the Sheep, North Wind, Sunny, #48" (2018)
c-print, image size1000mm × 830mm

16. 上村洋一
《transcribe (265s)》（2021）
ライトボックス 700mm × 1800mm × 150mm
-
Yoichi Kamimura
“transcribe (265s)” (2021)
Light Box 700mm × 1800mm × 150mm

上村にとって自然環境とは、自然と人工の境界が曖昧な領域である。フィールドレコーディングで録音された環境音は、デジタルデータでありながら、有機的にも聴こえる。《transcribe (265s)》は、ヘッドフォン作品《You are not alone (Sankaku Iwa)》の音源中の 265 秒分の音像の振幅変化のランダム性を 1 秒毎にバイナリ（二進法）に書き起こし（トランスクライブ）、光と色のパターンとして絵画的に再記述（トランスクライブ）した作品。正数（1）負数（-1）で表されたパターンを絵画的に表現することで、流氷の音が孕む揺らぎや瞑想的な雰囲気を、視覚的に表出させている。

17. 上村洋一
《You are not alone》（2021）
ヘッドフォン、iPod nano
［A］You are not alone (Minehama)：10 分 4 秒
［B］You are not alone (Onnebetsu)：10 分 6 秒
［C］You are not alone (Sankaku Iwa)：10 分 6 秒
-
Yoichi Kamimura “You are not alone” (2021)
Headphones, iPod nano
[A] You are not alone (Minehama): 10:04
[B] You are not alone (Onnebetsu): 10:06
[C] You are not alone (Sankaku Iwa): 10:06

上村が流氷のフィールドレコーディングをする時は大抵、独りでその環境に向き合い、長時間、じっと音を聴く。車や飛行機、鳥の鳴き声などの雑音を入れたくない時は、真夜中や夜明け前に録音することもある。上村はフィールドレコーディングを「瞑想的な狩猟」と呼び、そのプロセスは周りには誰もいない孤独な作業だが、同時に、聴こえてくる流氷の動物の様な音、海中のクラカケアザラシの鳴き声、海のうねりなどから、音を通して世界＝環境と浸透し、繋がっていると感じるという。